

平成 28 年度事業計画

事業運営方針

1. 世界かき学会設立後 10 年が経過した。5 支部体制は 4 年目に入り、会員は 41 개국 860 名を超えた。本年度は「基盤整備の 10 年」から、次の「飛躍の 10 年」に向けた初年度と位置付ける。支部長及び運営委員との連携、会員間の交流、支部活動の底上げを推進する。
2. 従来の学術集会に教育・文化的要素を付加した第 6 回国際かきシンポジウムは新しい試みとして注目された。これを総合的に評価し、次年度英国で開催するシンポジウムに反映できるかどうか見極めながら計画調整に着手する。
3. 国内では地域かきフォーラム事業やカキの研究に対する研究助成事業を通じて国内かき産業の振興を支援する。地域フォーラム事業については、一旦これまでの内容について見直しを行い、次年度以降のフォーラムの改善に資する。
4. 研究事業は前年度の課題を継続し、引き続き東北大学と共同研究を進める。

実施事業

1. 世界かき学会 (WOS) の運営

(1) 世界かき学会 5 支部の運営支援と会員間のコミュニケーションの促進

- ① 5 支部の活動には依然格差が認められる。アメリカ支部では IOS6 開催を機に会員が一気に 248 名に増加した。その多くがシンポジウムに参加し、一部は発表し、トレードショーに出展し、オイスターランドテイスティングに参加し、積極的な情報交流を行い、シンポジウムに高い評価を与えたものと思われる。WOS 本部として IOS6 を足掛かりに全米の組織づくりを目指すアメリカ支部長を支援しモデル支部の一つにしてゆく。
- ② 日本支部では既に支部ホームページの開設や支部役員の委嘱など他支部に先行し取組んでおり、支部運営モデルになるよう支援協力する。
- ③ アジア・オセアニア支部では支部長自ら会員向けニューレターの発信や会員のニーズ探索を行った。高く評価されたが、個人の活動に依存するあまり継続性に課題が残った。各支部がこの取組みを参考にしながら、地域事情に合った持続可能な仕組みを構築できるように、支部長と緊密な連携を図り、必要な助言・提言を行う。

④WOS「飛躍の10年」のスタートを機に、現在20名のWOS運営委員の支部別適正構成を検討し、各支部長の活動を支え助言協力できる運営委員を委嘱してゆく。

(2) 第7回国際かきシンポジウム (IOS7) の開催調整

IOS6はサイエンスとテクノロジー中心の従来型シンポジウムにカルチャーやエンターテインメントを融合させた新しい形のシンポジウムであった。例えば、カキを題材とした絵画・工芸品の展示、教育啓蒙的な寸劇、トレードショーなど多彩なイベントが付加された。

次年度英国で開催されるIOS7がこのような「IOS6」型か、従来型か、あるいは折衷型を指向するかを実行委員長となるヨーロッパ・アフリカ支部長と共に検討判断し、方向づけする。なお、英国におけるIOS7開催をもって5支部それぞれのエリア内でシンポジウムが開催されることになり、世界かき学会の大きな目標の一つが達成される。

2. かき地域フォーラムの開催

本事業は国内のかき生産地で開催し、地域市民へのかき食文化の普及啓蒙、かき生産者・流通業者と消費者の交流、さらに地産地消の促進などを目的とする地域密着型のフォーラムである。

第6回目となる本年度の開催地については、世界かき学会日本支部長の提案と現地関係諸団体の賛同を得て石川県七尾市が決定している。開催時期については、現地で毎年2月下旬に開催される「七尾湾能登かき祭」に連動して行う予定である。また、内容については、現地の消費者や生産者などのニーズを的確に吸い上げ、これらに対応したプログラムを組立てる。

3. かきに関する研究を行う大学等の若手研究者に対する研究助成

本事業はかきに関する研究を行う大学や研究機関等の若手研究者個人又はチームに対して研究助成を行い、かきに関する研究促進と持続的展開を目的としている。

公募内容は当研究所ホームページのほか、日本水産学会など関連学会のホームページにも掲載を依頼し、案内する。

本年度の助成件数・金額は昨年度と同様に3件、1件につき30万円とし下記のスケジュールで実施する。

- ・公募要領の告知：9月初旬
- ・公募締切：11月末
- ・審査結果の発表：2月中旬
- ・助成金交付：4月初旬

4. ノロウイルスフリーガキの生産法確立および養殖カキ品質向上のための研究

2006年に起こったノロウイルス胃腸炎の大流行とそれに伴って発生したカキに対する風評被害以来、「ノロウイルス胃腸炎の原因食品＝カキ」のイメージが一般消費者に定着している。その後様々な検討が行われてきたが、残念ながらカキ体内からのノロウイルスを除去する、有効な方法は現在まで見つかっていない。すなわち、ノロウイルスフリーのカキを生産するには、「カキにノロウイルスを取り込ませない」ことが肝要であり、本事業でもそのための方法を検討することが目的である。

ノロウイルスがカキの鰓上皮細胞、消化管上皮細胞の表面糖鎖を特異的に認識して結合している可能性をふまえ、昨年度から、糖結合タンパクであるレクチンの性質を利用して、鰓組織にノロウイルスを結合させない方法の探求を開始した。今年度は、これを消化管の細胞についても進める。

養殖カキの品質向上については、同一場所で養殖されているマガキを対象に、季節、生殖周期、年齢、そして養殖深度の違いなどにより、マガキの代謝産物（メタボローム）がどのような異同を示すのかを解析し、それらの結果と身入りや味との関連を明らかにする研究に初めて取り組む。

本事業は当研究所がこれまで東北大学との共同研究として実施してきた事業を発展的に継続、応用展開するものである。

5. カキなど二枚貝の特性を生かした環境評価法に関する研究

近年、環境評価の新たな取り組みとして、そこに生息する生物を指標とし、その生物が持つ生体因子の中で環境の変化に対し鋭敏な反応を示すものをバイオマーカーとして用いることは必須になってきている。

当研究所では、最適の沿岸指標生物と考えられるマガキを対象として、環境評価法の研究を開始した。特に、平成26年度から27年度は、マガキ血球遺伝子の網羅的発現解析法を適用して、大きな成果を得ることができた。今年度は、マガキ血球遺伝子の研究をさらに進めて有効な環境評価法として確立する。また、マガキ体内の細菌叢（マイクロバイオーム）がマガキの生理をよく反映していること、環境要因の影響を受けて変化することがわかってきた。そこで、マイクロバイオームがバイオマーカーとして有効であるかを検証する。

本事業は当研究所がこれまで東北大学との共同研究として実施してきた事業を発展的に継続、応用展開するものである。